九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[089] 語文研究表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/10177

出版情報：語文研究. 89, 2000-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《会員著書紹介》

今井源衛著

『大和物語評釈』上・下

著者はこれまで『大和物語』の注釈を『国文学』（学燈社）に昭和三十六年九月号から昭和四十三年九月号まで連載され、その後梅光女学院大学紀要『日本文学研究』にも発表されている。これらを基に新たに手を加えられ、一書になされたのが本書である。著者の『大和物語』の注釈は『日本古典文学大系』（岩波書店）〈阿部俊子氏と共著〉にもあり、これが二冊目になる。上巻には第一段から第百二段まで、下巻には第百三段から百七十三段までの評釈を収められている。また巻末には桂宮本系諸本及び御巫本・鈴鹿本の付載物語の評釈と『大和物語』に関連する『平中物語』の諸段本文とを挙げられており、綿密な解題を付されている。付録には「研究書目一覧」「『大和物語』関係天皇家略系図」「参考地図」「索引（人名・和歌・事項）」が載る。

本書における構成は各章段の本文に対して【語釈・校異】【通釈】【余説】の三つに分けられており、まず【語釈・校異】の項では室町末期成立の『大和物語鈔』から現代の諸注釈、合計二十三種を参考にした詳細な注釈と、底本（尊経閣文庫蔵藤原為家筆本）と十五種の諸本（伝為氏筆本、桂宮本、御巫本など）を対校して、その異同を列挙している。また、【通釈】の項では明確な現代語訳が付けられている。【余説】の項は全ての章段には付けられてはいないが、本書の特徴を顕著に示すものであろう。著者の造詣深い見解が表出しているだけでなく、関連ある先行の諸研究にも普く配慮があり、甚だ示唆に富む。

このような本書は物語及び和歌の研究に資するのみならず、広く中古文学研究においても有益な存在であることは言うまでもなく、これらの研究を志すものにとっては必備の書となるであろう。

（上巻　平成十一年三月　笠間書院　A5判　三二〇頁　九、五〇〇円、下巻　平成十二年二月　笠間書院　A5判　五五二頁　一二、五〇〇円）

今井源衛・古野優子編

祐倫著 源語梗概・注釈書

『山頂湖面抄諸本集成』

『山頂湖面抄』（以下『湖面抄』）は、中世源氏梗概書『光源氏一部歌』（以下『一部歌』）の作者と目される比丘尼祐倫によって著された。奥書識語によれば文安六（一四四六）年の成立であり、『源氏大鏡』に先行すると考えられる『湖面抄』は、すなわち現在のところ最古の源氏梗概書ということになる。

『一部歌』は周知の如く、すでに今井氏によって懇切な解題・索引が付された翻刻が出版されており、今回は『一部歌』の成立よりさらに先立つこと四年の『湖面抄』の諸本集成が初の刊行の運びとなった。

現在、所在の分かる『湖面抄』諸本は計七本あり、本書はそのうち次に挙げる六本を収録（うち大東急本は神宮文庫本と極めて近い本文であるため、神宮文庫本の異同という形で）し、一挙に『湖面抄』の簡便な通覧を実現させた。

神宮文庫本　源氏目録之和哥
（校合）大東急文庫本　源氏物語歌註
静嘉堂文庫本　山頂湖面抄・水原
天理図書館本　源氏貫雲伝
書陵部本　山頂湖面抄
内閣文庫本　山頂湖面抄

本書では、これらの本文と未収録の島原松平文庫本「水原」を合わせて伝本の系統立てを行い、和歌・秘事・注釈等の比較から第一類系統と第二類系統に分けた。従来『湖面抄』の類に含まれなかった神宮文庫本を最善本として巻頭に掲載し、以下順次天理図書館本までが第一類本、書陵部本・内閣文庫本を第二類本とする。

猶、巻末に「諸本記事対照表」を備える。この表は『湖面抄』の記事全文について、諸本の配列とその記述量を対照表示したものである。諸本の各巻名歌の各句注の記述字数（和歌以外）と各句注内に見える和歌その他（物語中の歌・引歌・引事類）の所収状況が一覧できる。

（平成十一年七月　笠間書院　A5版　三五九頁　九、〇〇〇円）

金原　理著
『詩歌の表現—平安朝韻文攷』

本書は著者が近年発表された十編の論文を一書に纏められたものである。著者の論文集は前著『平安朝漢詩文の研究』（九州大学出版会　昭和五十六年）があり、これが二冊目となる。本書に収められる論文の表題は以下の通り。

『古今和歌集』の表現構造
三代集の表現
注釈の意味—〈言葉あそび〉の詩をめぐって
嶋田忠臣と『荘子』
道真の賦—「秋湖賦」試読
歌人伊勢
源経信—その詩人としての側面
釈蓮禅
「兎裘賦」と『史記』
『元久詩歌合』と「西湖図」

これらの内容について一々概要する遑はないが、和歌に関

する論考ではその表現の背景としての漢（詩）文の存在に注目せられ、綿密な注釈を施し、そこから新たな解釈を加えられており、また、漢詩文を中心とした論考では作品中に見える字句、平仄から窺えるその表現の意図を明確に解析されている。その他、内容は多岐に亘るが、最近発表された「『元久詩歌合』と「西湖図」」はそこに所収される「水郷春望」題下の十九編の詩が、白詩などの表現を踏まえることに配慮されつつ、唐土より将来された「西湖図」から多分に影響を受けている可能性があることを指摘されている。現今、注目されている詩文と絵画との関連性を示唆するものであり、その点で一種の方法を確立したものといえよう。著者が専攻される日本漢文学、和漢比較文学という分野では確たる研究方法は成り立っていないといってよいだろうが、このような状況下で本書所収の論文は一つの方法を示すものとしての存在であることも見落とせまい。平安・鎌倉期の漢詩文研究には資するところが多い一冊である。

（平成十二年一月　九州大学出版会　四六判　二四〇頁　三、四〇〇円）

後藤昭雄編『日本詩紀拾遺』

近世後期の代表的詩人・市河寛斎が平安朝の漢詩文を蒐めた『日本詩紀』は、その収録範囲の広い点において、また正確な本文を期した点において、現在でも有用の詞華集として周知される。しかし文献渉猟のままならなかった近世のことゆえ、多くの遺漏あることもまた周知に属することであろう。

本書は『拾遺』との名が示すように、寛斎がその際に目睹しえなかった平安朝の作品を補ったものであり、その意味では現時点での平安朝漢詩文研究の到達点を計る指針ともなり得、また多年、この方面の資料発掘に精力を傾けてきた編者ならではの作と言えよう。

これまで編者は、「『日本詩紀』拾遺（一）～（九）」（「大阪大学教養部研究集録（人文・社会科学）」第33輯～41輯、一九八五年～九三年）において『詩紀』拾遺作業を進めており、本書はこれらを母胎とし、さらに新出資料を加えたと言う（「あとがき」）。構成は、全体を「第一部　日本詩紀既出詩人」と「第二部　日本詩紀未収詩人」とに分かち、記述体裁は『詩紀』にことごとく倣う。また末尾には「作者索引」、「詩題索引」、「詩題事項索引」、「文献索引」の四種の索引を備えて利用の便をはかる。

なお、『日本詩紀』自体の翻刻としては、これまで国書刊行会本（明治四十四年刊）があったが、この度の『拾遺』刊行に伴い、後藤氏によってその翻刻の誤りが正されて復刊の運びとなったことも喜ばしい。『拾遺』ともども平安朝漢詩文の

研究に大きく資することと思われる。

（平成十二年二月　吉川弘文館　A5判　二五九頁　一一、〇〇〇円）

工藤重矩著

『平安朝和歌漢詩文新考　継承と批判』

本書は、平成六年に刊行された著者の『平安朝の結婚制度と文学』に次ぐ論文集で、昭和五十五年から平成十一年の間に発表された十六篇の論文より成る。内容は次の通り。

Ⅰ　和歌解釈の方法

第一章　在原業平「月やあらぬ」の解釈／第二章　古今和歌集一四八「唐紅のふりいでてぞ鳴く」の解釈／第三章　ほととぎすの季節と鳴声の和漢比較―古今和歌集一四八の解釈補考―／第四章　古今和歌集四六九「ほととぎす鳴くや五月の」の解釈／第五章　古今和歌集の「おほかたは」の解釈／第六章　大和物語初段の解釈／第七章　紫式部集一・二番歌について―解釈、伝記、説の継承―／第八章　紫式部集四・二八番歌の解釈―伝記資料として読む前に―

Ⅱ　平安朝和歌史点景

第一章　べらなりの和歌―古今後撰集時代の場と表現―／第二章　後撰和歌集の撰集―奉行文・禁制文、梨壺、撰者をめぐる諸問題―／第三章　後撰和歌集の性格―和歌における褻と晴―／第四章　詞花和歌集の成立と同時代の反応―金葉和歌集奏覧本と後葉和歌集をめぐって―

Ⅲ　平安朝漢詩文の和漢比較

第一章　平安朝漢詩文における縁語掛詞的表現／第二章　平安朝における官職唐名の文学的側面／第三章　三月三日の柳―枕草子六段の翁丸はなぜ柳のかづらをしたか―／第四章　七夕の鵲橋―鵲は如何にして橋を架けたか―

研究者名索引

あとがき

前著と同様、旧来の誤解・通説を鋭く指摘し批判する態度は、本書においても全篇に貫かれている。著者は「あとがき」に、「先行論文をどのように批判し、あるいは継承するか。そして自分の論文がどのように批判され、あるいは継承されるか。どちらの側から考えても、事はなかなか容易ではない。」と述べる。通説という言葉や碩学の名によって、曖昧に片づけられてしまいがちな数々の諸問題を、再度、新たな視点から捉え直そうとする著者の「継承と批判」の姿勢とその方法は、研究者にとって頗る示唆的であり、本書は、今後の平安朝和歌・漢詩文研究に有益な一書となり得るものである。

（平成十二年四月　風間書房　A5判　三六五頁　一一、〇

○○円）

瀬里廣明著
『露伴とその時代』

本書は、前著『幸田露伴と安岡正篤―東洋と西洋』（白鴎社、平成十年十月）から一年余りで書き下ろされたもので、『文明批評家としての露伴』（未来社）以来十冊目の著作にあたる。

「真の露伴像を追求して四十数年を経過し、漸く最終段階に入ってき」たという本書の目次は次のようになっている。

自序
第一章　露伴の神仙道とハイデッガーの野の道
第二章　近代神仙譚としての「観画談」
第三章　露伴における道教の世界
第四章　露伴の「悦楽」とその時代
あとがき

「露伴の巨大な文学と思想の世界」と格闘する著者は、様々な作品と比較対象を挙げながら論じる。第一章では、「仙人呂洞賓」、「仙書参同契」を神仙道、道教、ハイデッガーなどの思想と絡め、第二章では、「観画談」を大正時代における精神異常の問題との関連からフロイトやユングの理論と絡める。また第三章では、「論仙」、「仙書参同契」、「新浦島」を取り挙げ、露伴における道教或は道教的なものの重要性を指摘する。第四章では、主に「悦楽」を挙げ、この作品は「論語」を体得した露伴が孔子の教えの真髄を説いたものとする。そして、これらの考察は本書のタイトルにあるように露伴の生きた時代に基づいて行われており、彼の思想には近代日本（人）の失った東洋的なものの精粋があるという。

さらなる「最終段階」に入った著者の到達点を示した著作が待たれる。

（平成十二年一月　白鴎社　A5判　二六五頁　二、六〇〇円）

木部暢子著
『西南部九州二型アクセントの研究』

西南部九州に分布する方言において特徴的な「二型アクセント」に関する、著者の研究成果である本書は、次の四章から構成されている。

第一章　西南部九州二型アクセントの姿
第二章　十八世紀薩摩の漂流民ゴンザのアクセント
第三章　西南部九州二型アクセントの成立
第四章　トカラ列島の方言

第一章では方言調査を通して、当該方言の二型アクセントの特徴のみならず、韻律単位（モーラ方言かシラビーム方言

か）の検討、イントネーション（音調）について記述的に明らかにしている。また第二章は、平成九年より鹿児島県立図書館に設置された、ロシア科学アカデミー所蔵の原本マイクロフィルムを用いた「ゴンザ資料」研究である。細心の注意を払い、十八世紀当時の薩摩人ゴンザのアクセントを再構し、当時の薩摩のアクセント体系を明らかにする。第三章は、従来問題とされてきた屋久島アクセントの新旧や、西南部九州二型アクセントの成立に関する、筆者の最新の見解が示される。第四章は、南西諸島トカラ列島の方言調査の記述的研究であり、アクセント関係にとどまらず貴重な調査の成果が収められている。

構成を見て明らかなように、まずフィールドワークにより現在の姿が、そして文献によって過去の一時期の姿が、そしてそれらの比較対照により、アクセント体系の成立に関する史的展開が明らかにされている。このように、包括的な研究によりなされた本書は、西南部九州二型アクセント研究において、一つの区切りをなす成果として位置づけられよう。

（平成十二年二月　勉誠出版　A5判　四五四頁　一六、八〇〇円）